

岡崎市議会議長 様

支出番号

会派名 民政クラブ

代表者名 井町 圭孝

下記のとおり、政務活動を実施したので報告します。

政 務 活 動 報 告 書

令和5年3月15日 提出

活動年月日	令和4年10月27日 (火)	
氏名	三宅 健司、鈴木 英樹、井村 伸幸、井町 圭孝、加藤 嘉哉、原 紀彦	
用務先 及び 内 容	1 10月27日	用務先 愛知県豊田市 内 容 中核市サミット2022in豊田
	2 月 日	用務先 内 容
	3 月 日	用務先 内 容
	4 月 日	用務先 内 容
	備 考	



委員会・会派名	井町圭孝、三宅健司、鈴木英樹、井村伸幸、加藤嘉哉、原紀彦（報告者）
研修日時	令和4年10月27日（火）13:00~17:10
視察先・概要	愛知県 豊田市（令和4年10月1日現在） ・人口 418,009 人 ・世帯数 184,245 世帯 ・面積 918.32km ² ・人口密度 455 人/k m ²
視察内容	中核市サミット 2022 in 豊田 多様な主体とつながり、つくり、暮らしを楽しむ ～中核市が描く「ミライのその先」～ 【基調講演】未来の未来を探る～AI・組織・コミュニケーションの視点から～ 【パネルディスカッション】時代の変化にしなやかに適応する産業のミライ 【パネルディスカッション】多様なつながりと描く地域共生社会のミライ
選定理由（目的）	中核市が描くミライのその先の実現に向けた議論を拝聴し、今後の取り組みの参考とする。
岡崎市の現状と課題	近年、コロナ禍を契機とした生活や暮らしの変化に加え、脱炭素、デジタル化など、変革の動きが加速している。時代の変化に迅速に対応するとともに、未来へのロードマップを明確に見据え、見えてくる課題に向けて取り組むことが必要である。
研修概要及び評価	【基調講演】 【演題】未来の未来を探る～AI・組織・コミュニケーションの視点から～ 【講師】大澤 正彦（おおさわ まさひこ）日本大学文理学部情報科学助教／次世代社会研究センター センター長 1. 自己紹介 ・人工知能研究者（テーマは汎用人工知能） ・ドラえもんを作ることが夢（みんなに認められ愛されるドラえもんをみんなでつくる） 2. 未来の未来とは ・掴み取りたい未来をどうやって掴み取るかの考察 今の未来予測と30年前の未来予測は、そんなに変わらない。テクノロジーや環境は大きく変わっても人間の想像力はそんなにアップデートされていない。今この瞬間より後ろから連続的に変化する未来を1個1個追っていく。そのわずかな変化を繰り返し30年分積み上げることでたどり着くのが未来。まずは身近な未来を解像度高く予測し、次にどのような変化が起こるのかを予測していくロードマップを描く。 3. 誰ひとり取り残さない80億人の仲間と「ともに」歩むロードマップ ・ともにドラえもんをつくるための考察 掴み取りたい未来は、誰もがそれぞれのやりたい／得意なことに集中し、それを評価・協力してもらえる未来。 ・未来を掴み取るための戦略 あらゆる価値を認めるコミュニティをベースとした研究・教育。ともにドラえもんをつくる環境構築ロードマップは（他の視点から見ると）世界を結束させていくロードマップ・全員が個性を活かした生産性の高い組織をつくるロードマップ・次世代に求められる能力を育てる教育を実現するロードマップ・誰一人取り残さない共生社会をつくるロードマップ。



【主催者歓迎挨拶
中核市市長会会長
濱田 高槻市長】



・**コミュニティの考察** プロジェクトを進める上で、始めに何をやるかではなく、コミュニティをベースとした考え方で進める。まずは自己紹介から練習をする。そうすると自分がなぜここに居るのか、何のためにここにいるのか、何をしたいのか、自分自身のことを言語化できるようになる。それからコミュニティに接続すると自分の意思決定が明確になり情報の感度が上がり、コミュニティという場がシラバスのように見えてくる。

4. ミライのその先へ

・**ドラえもんができたなら、何をして欲しいか** 仕事を楽にして欲しい、育児を手伝って欲しいなど、その願望は未来ではなく今必要なのではないか。この問いかけは、今の自分の足かせ・課題を明確にする問いかけだと言える。

・**未来への考察** 未来を考えたからこそ、未来のその先が見えてくる。未来のその先を考えたからこそ、今や未来が見えてくる。今と、未来と、その先を、行ったり来たりしながら、ロードマップの解像度を上げて行く。「ミライのその先」に意志は宿るか。その意志で「イマ」はどう変わるかということ。

【第1会場 パネルディスカッション】

テーマ : 時代の変化にしなやかに適応する産業のミライ
 コーディネーター : 名古屋大学 名誉教授 山田基成
 コメンテーター : 有志団体 Dream On 代表 中村翼
 パネリスト : 姫路市長、奈良市長、松江市長

主旨：コロナ禍を契機としたデジタル化の急速な進行や、2050年カーボンニュートラルの実現に向け、積極的な温暖化対策を通じて、産業構造や社会構造の変革がもたらされ、多くの産業もその在り方の転換が加速している。また、近年の人口構造の変化により、地域の産業を支える中小企業等においては、これまでに培ってきた高度な技術の伝承や継承者不足などの問題も顕在化する中、イノベーションや新たな挑戦への機運醸成が求められている。地域の核である中核市は、新しい社会像価値観の創出による産業の転換を的確に捉え、「産業のミライのその先」をイメージし、これまでの取り組みをアップデートしながら、自治体としてのあり方を描き直す必要がある。自治体としてこれらの産業変革とどう向き合うべきか、次世代の産業をどのように創出していくべきか、更に、実証実験等の先進的な取り組みの先にどのような「ミライのその先」を描くべきか、各市の事例を基に議論を深める。

1. 姫路市長の発表

・**現状と課題** 兵庫県内の産業部門と業務部門のCO₂排出量の約半分(48%)を播磨臨海地域が占めており、脱炭素化への機運醸成と事業活動の脱炭素化が必要。

・**姫路市が目指す地域脱炭素の将来像** コベネフィット(共通便益)による魅力ある地域の実現を目指す。

・姫路市の取り組み

①姫路城ゼロカーボンキャッスル構想②ボトルtoボトルリサイクル事業③カーボンニュートラル(CNP)形成計画策定の推進

2. 奈良市長の発表

・**現状と課題** 若年層の市外流出、女性就業率の低さ

・奈良市の取り組み

①若者が求める就職先の創出②企業との連携（企業版ふるさと納税）③高等教育機関との連携強化

3. 松江市長の発表

・**現状と課題** 松江駅から松江城につながる中心市街地は、1960年頃は普段の生活でも多くの人出でにぎわっていたが、現在（2022年）の平日は、特に人出が少なく閑散としている。

・**松江市の取り組み**「松江ならではの」の手仕事・ものづくり文化に光をあてる。

①出雲かんべの里工芸館リニューアル②職人商店街創出支援事業補助金の活用による商店街の活性化③市民参加によるリサイクルの推進④まつえ循環プロジェクト⑤まつえファーマーズマーケット

4. コメンテーター 中村翼

・**自己紹介** 2009年トヨタ自動車(株)に入社し、量産車設計に従事した。2012年業務外で有志団体 CARTIVATOR を設立し、空飛ぶクルマの開発を開始。トヨタグループ含む100社のスポンサー支援のもとで、日本初の有人デモフライトを達成した。2018年に独立し、現在は起業家 兼 慶応大・空飛ぶクルマラボ特任助教。さらに2021年より有志団体 Dream On と改称し、未来生活体験テーマパークの開発に挑戦している。

・**発表を受けての感想と質問** 各市ともさまざまに具体的な取り組みに力を入れていることに感銘を受けている。その上で、未来のことを具体的に描くのは難しいと感じている。そこでどのように想像しながら2050年カーボンニュートラルに向けて取り組むのか考えなどを伺う。

・**姫路市** 今の状況だと達成は厳しい。車社会から脱却することで、脱炭素に向かうし健康にも良いということで、今年国土交通省のまちづくりアワード大臣賞をいただいた。これから大きく脱炭素に向けて大きく舵を切っていく。

・**奈良市** 今は少子化の緊急事態宣言だと思っている。20年後の新成人はもう数が決まっているので外国人労働者の方とどう調和を図って行くか。また、奈良県単体ではなく関西圏でチャレンジすることが求められていると考える。

5. コーディネーター 山田基成

・**まとめ** それぞれの市のおかれている状況を把握、産業創出に向けて、それぞれの地域資源を活かしながら取り組んでいる様子がよく分かった。また、産学官連携を行って行くことがポイントということも認識できた上で、以下2点お伝えする。1つめは、**未来のその先の予測はしにくい、自分たちのまちがこうなっていきたいという理想の姿を描いていないと、目指すものが分からないのではない**か。若い人の力も借りながら、まずは具体的に描くことが重要。2つめは、少子化で人材不足が目に見えている。既存の人材の活用するための学び直しに加えて、2030年、2040年、2050年の未来の問題は日本人だけではなく、あらゆる国籍・あらゆる人種から成る集団でイノベーションに挑戦する必要がある。

【第2会場 パネルディスカッション】

テ — マ : 多様なつながりと描く地域共生社会のミライ

コーディネーター: 同志社大学社会学部教授 永田祐氏

コメンテーター：日本大学文理学部情報科学科助教／次世代社会研究センター
センター長 大澤 正彦氏

パネリスト：豊田市長、岐阜市長、吹田市長

1. 豊田市の取り組み

健康寿命と快適期間を合わせた幸福寿命という考え方を基本に主に3つの先進的な取り組みを紹介

① 誰ひとり取り残さない包括的な支援体制の構築

- ・困りごとを抱えたすべての地域住民の相談を受け止め、支援につなげる体制を構築（市内5か所に福祉相談窓口設置 等）
- ・サポートが必要な状態であっても、自分らしく暮らすために必要な権利擁護支援の体制を構築（権利擁護支援委員会・生活基盤サービス事業者・意思決定支援の組み合わせによる支援をモデル的に実施）

② 健康寿命を延伸する取組

- ・官民連携による社会参加・介護予防プログラム（SIB）の提供など（ずっと元気！プロジェクトを43事業者を巻き込んで実施）

③ 快適期間を充実する取組

- ・地域リハインベーションセンターの設置（産・学・官連携）
- ・地域医療人材育成センターの設置（訪問看護師の育成に注力）

2. 岐阜市の取り組み

ワークダイバーシティの推進に取り組んでおり、将来的な国の制度の構築を目指して様々な実証実験を実施

① 超短時間雇用創出事業

- ・障がいのある方の約半数に就業意欲があるものの求人側とのギャップにより働けないことが多いため、『特定業務のみ×週20時間未満の雇用を創出』。しかし国の現行制度では週20時間未満の雇用は障がい者雇用率に算定されず企業側にも負担がかかっている状況のため今後の国の見直し議論の進展に期待している。

② テレワークを活用したショートタイムワーク事業

- ・ソフトバンク（株）と包括協定、覚書を締結し、テレワークを活用して時間や場所に縛られない雇用のスキームを構築。

円滑な再就職を可能とする育児と仕事を両立できる環境を実現

③ WORK! DIVERSITY 実証化モデル事業

- ・働きづらさを抱えている例えば、ひきこもり状態の方や障害者手帳を取得していない方など公的支援が受けられれば働けるかも？との考えから障害者総合支援法で定める就労移行支援事業所等を活用し、スキームを構築。働きづらさを抱える方の就労と自立を支援する環境を実現し、これまで働く機会に恵まれなかった方の居場所と出番を創出。

3. 吹田市の取り組み

① 中核市アライアンスとして新たな圏域をデザイン

・県境を越える4つの中核市 NATS（西宮市（N）、尼崎市（A）、豊中市（T）、吹田市（S））による様々な政策の連携をしている。

（ただし協定締結はしていない）

連携をしているものは

地球温暖化対策基本協定、気候非常事態共同宣言、バイオマスプラ製ごみ袋、労働相談、シェアサイクル、職員交流など多岐にわたる。

連携を阻害しているものとして

- ・政策を単一自治体同士が競争的に取り組んでいる
- ・マスコミ等によるランキング
- ・市民が自由に移動、活動する社会経済文化圏域を自治体ごとに考えてしまうことが挙げられ、自治体同士で連携してはならないことなんて無いとの考えから
- ・過度に束縛されない柔軟で動的なアライアンス
- ・当面のコストパフォーマンスではなくパフォーマンスコスト
- ・首長主導の属人的連携の弱み→行政組織に制度として織り込み、文化とすることを提案された。

4. コーディネーター 永田祐 氏

・まとめ キーワードは越境とのりしろの重ね合わせ、このような議論が出来たと考える。様々な困難があっても地域に居場所があれば幸せの実感につながるし、多様な主体がお互いののりしろを重ね合わせることが大切。多様な人とつながって多様な人と一緒に作っていくことが大切であり、このような場所が増える事が大切と考える。更に新しいテクノロジーやイノベーションの活用がその選択肢を更に広げてくれる未来の可能性がある。

【中核市サミット豊田宣言 2022（案）が採択】

中核市は、地域の中核都市として、地方分権の推進と地域の発展に大きな役割を果たしてきました。デジタル化や脱炭素といった変革とイノベーションの進展による新たな手法や価値が創出され続ける中、私たち中核市は、これまで描いてきた「ミライ」の実現に向けて、新たな価値基準への転換を進めるとともに、将来にわたって持続可能なまちづくりを進めて行くために、「ミライ」のさらに「その先」を描きなおす、重要な時期を迎えています。本サミットでは、「多様な主体とつながり、つくり、暮らしを楽しむ～中核市が描く『ミライのその先』～」をテーマに、「時代の変化にしなやかに適応する産業のミライ」、「多様なつながりと描く地域共生社会のミライ」に焦点を当てて議論を行い、次のとおり、全国の中核市が連携して取り組むこととしました。

1. 産業構造の変革や人口減少などの社会の変化への適応が求められる中、私たち中核市は、多様な主体との連携のもと、新しいモノや考え方と豊かな地域資源を融合しながら、時代の変化にしなやかに適応した「産業のまちづくり」を推進し、持続・発展し続ける産業のミライのその先を目指します。

2. 人々の価値観や生活様式が日々変わりつつある中、私たち中核市は、市民の幸せを実現するために、その変化に向き合うとともに、多様な主体の力を重ね合わせ、

	生かし合うことで、多様なつながりと描く「地域共生社会のまちづくり」を推進し、誰もが幸せを感じながら生きるミライのその先を目指します。 中核市 62 市の人口は約 2,275 万人となり、全国における存在感と地方自治の理念の実現に向けた中核市の責任は、今後もより一層大きくなっていきます。私たち中核市は、それぞれの地域の特性を生かしながら、ともに連携協力して以上の取組を推進し、多様な主体とつながり、時代の変化に適応した持続可能なまちづくりを推進することで、日本の明るい「ミライのその先」を描いていくことを、ここに宣言します。 令和 4 年 1 0 月 2 7 日 中核市市長一同
本市への反映 (意見・課題など)	【井村伸幸】 「時代の変化にしなやかに適応する産業のミライ」と題して行われた PD (パネルディスカッション) では、姫路市、奈良市、松江市の各市長による報告が行われた。共に、歴史的文化遺産を保持している中核市ではあるが、観光産業を前面に押し出すのではなく、姫路市のように自市としてだけでなく、播磨臨海地域として脱炭素社会の実現にむけ取り組まれていることや、奈良市のように若年者の市外流出や女性就業率を向上させるために新しい価値を生み出すことで「選ばれるまち」を目指して取り組まれていることは参考になった。 特に松江市では総合計画ありきではなく、松江にしかない強みを見出し、先進地に追いつくのではなく、先進地が巡り巡って松江の古に追いついてくるとの発想の転換を図られていることは本市においても参考にしてはと感じた。 【加藤嘉哉】 今回のサミットテーマは、「多様な主体とつながり、つくり、暮らしを楽しむ～中核市が描く「ミライのその先に」～」であり、基調講演、パネルディスカッションが行われた。パネルディスカッションにおいて、「時代の変化にしなやかに適応する産業のミライ」をテーマに、姫路市・奈良市・松江市の各市長からそれぞれの市における報告があった。同じ中核市ではあるものの、3 市 3 様の地域性、文化遺産、特色を持ち合わせており、それぞれが独自の取組みによって、観光誘致、就職等での「選ばれるまち」を目指していることがわかった。本市においても、多くの文化遺産を有していることから、観光をはじめとしたミライを見据えた取組みを進めていく必要性を強く感じた。 【原紀彦】 本サミットでは、「多様な主体とつながり、つくり、暮らしを楽しむ～中核市が描く『ミライのその先』～」をテーマに開催された。 基調講演では、「時代の変化にしなやかに適応する産業のミライ」を拝聴し、未来をより鮮明に描くことが、本市における課題への的確な対応につながってくるものと考えることができた。大澤正彦先生のドラえもんをつくるための取り組みを通じて、今後のミライをどう描くべきか、というテーマを考える上で大いに参考となった。 パネルディスカッションでは、「時代の変化にしなやかに適応する産業のミライ」に焦点を当てた議論を拝聴した。発表された姫路市・奈良市・松江市はそれぞれ課題を抱えながら、特有の地域資源や風土を最大限に活用するとともに、多様な主体

と連携を図り、取り組みを創出している内容がとても参考になった。コーディネーターの山田基成先生からお話があった、より具体的に未来を描くことや、人と人、人と資源が世代や分野を超えて多様な主体とつながり、時代の変化に適応した地域をともに創っていく社会が、本市の将来においてもさまざまな課題を解決する上で大変貴重なディスカッションだったと感じた。

【三宅健司】

「多様なつながりと描く地域共生社会のミライ」と題して豊田市長、岐阜市長、吹田市長から事例発表がされた。地域のつながりは年々希薄になり、日常生活において、地域住民同士の会話はほとんどないといってよい状態が続いている。そうした環境下で、一人暮らし、障がい、介護、引きこもり、防災減災など地域で克服しなければならない課題は山積している。地域で解決できることは地域で行うためにICT など新しい技術を積極的に取り入れ、また、従来からあるお隣さんとのお付き合いも復活させ、電話による気軽な相談窓口の利用、あらゆる手法を用いていくことが大切であると感じた。

そして、中核市同士や近隣自治体との連携も日ごろから取り合うことも重要である。自治体の枠にとらわれがちであるが、垣根を低くして連携することによって、早期の問題解決ができることもあるのではないかな。個人の意識も変えていく必要があると感じた。

【鈴木英樹】

基調講演と第2会場（多様なつながりと描く地域共生社会のミライ）のパネルディスカッションを通じ感じたことは、誰ひとり取り残さないためのまちづくりを進めるためには、お互いの良さを活かしあいながら共生するためには、利他の考えが重要ということのを再認識しました。そして、市の課題解決のためには、課題認識を共有できる仲間の形成から輪を広げる。都市間連携においては、組織間の人材交流も含め、風通しの良い環境を整備することにより、その経済圏に住む市民の生命を守ることに、住民サービスの向上につながると感じました。本市及び周辺自治体においては、財政的に安定している市町に属します。自治体競争ではなく、この地域に住む市民が、生涯幸福に住むことが出来る地域づくりをするために、地域連携ができるようなプラットフォームの構築が図られるように働きたいと思います。

【井町圭孝】

基調講演及び各市の事例紹介で共通して言えることは、新たな仕組みを考え実行していることであり、多様な主体とつながり、支えあり、教えあいながら前進していること。広域的な連携をしてはいけないことなんて無いと吹田市長が発言されたが、人口減少社会においてこの考え方は必要だと感じた。様々な政策において西三河一体となった取り組みを進めていくことを考えていく必要性を感じた。



中核市サミット 2022 in 豊田
開催会場 名鉄トヨタホテル前にて
撮影